

■ペピの観察記録(1974-1975)■



はじめに;

精神分析とは、ひたすら《フィーリング(感情)を思考すること》である。精神分析に限らず、心理臨床の全般がそうであろう。その眼目とは個々人の中に‘心的スペース mental space’を開拓してゆくことにある。明らかにそれはハウツウ式に身に付くものではないのだが、一般にどうやらそのように勘違いされている向きがある。それが今の日本の心理臨床士を志す者たちへの教育における盲点では



なかろうか。おそらくそこに未来はない。なぜならば、「メンタル・スペース」とは思考が未来形(future)を孕む‘場’なのだから。言い換えれば、そこでは未来を担い抱え、そして未来に創造的に対応してゆく、そうした精神がまさに働く(mind at work)‘場’ということになる。心理臨床においては、対象に‘今・ここ now/here’で寄り添いながら、その固有なる心の営みに意味づけをし、筋立ててゆく。つまり、意味の形象化(言語化)が求められる。それらの意味が‘未来を孕んでゆく’のを手助けすることが肝要となる。‘振り返り(回顧する)’とともに‘夢想(想像する)’ということを実現する、そうした精神の生成過程を期待したい。そして究極のゴールとは、人間の「心 mind の進化」であろう。これに果敢に挑戦してきたのが【タヴィストック・クリニック】の《乳幼児観察 Infant Observation》という伝統なのである。

今この時代に蔓延っている風潮、すなわち刹那的・短絡的・功利的な心のありようにどうしたらわれわれは抗し得るのか。是非とも「考える力・悩む力」を養いたい。それでこそいのちは未来に受け継がれてゆくのだから・・・。そして取り分けて、もしもあなたが心理臨床家をめざすということならば、その意味を改めて問うてもみたい。さて、ここで私は《ペピの観察記録》を提示するわけだが、「発達」を研究する心理学者の観察記録とどう違うのかは一読してお分りにならないかも知れない。問題は観察後のことになる。それは即ち、<それを見た。そして私はどう感じたか。それ故に私にとって物事がこのように見えてきた>といった類の《私の視座の変容》となる。即ちこれが‘未来を抱え・担う’の謂である。

ペピの観察は、1974年以降の2年間継続されている。40年という時の隔たりを経て、今手許に残されているのは、私が Mrs.マーサ・ハリスの乳幼児観察セミナーで発表した際に提出したところの英文タイプで綴られた観察資料であり、他にも毎回観察後に書き留めてあったメモ書きのノートがある。英文タイプされた文章はなんとか読めるシロモノで、思いの外に躍動感に溢れていて懐かしかった。が、メモ書きの方は絶望的である。もはや筋を辿れない。しかしながら、折々の私の走り書きが、観察を筋立てる上で幾らか記憶の空隙を埋めることもあったのも事実で、勿論理解の助けとなった。

ここに私が経験したペピという男児の成長の記録を公開することの意味が問われるだろう。ペピの成長はごく一般の子どもの発達そのままと言える。ごくごく健全に育っている。そうした発達上の客観

的叙述がなされていないわけではない。だが、おそらく発達心理の専門家の著作には見られないものがそこに垣間見られるであろう。それは観察者としての私の眼差しに映ったものの描写である。それは即ち、ペピの、また母親の心に寄り添いながら、必ずしも言葉にし得ないとしても、折々にさまざまな思いを抱え込んでゆく私（観察者）という存在のありようである。驚きで目を瞞るやら思わず溜め息するやら、感嘆の思いに浸るやら、時としては故知らず深く躓く自分がいたり、といった具合に…。それらはしばしば語るには困難な事柄である。これほどの時を経て、いかに記憶を辿ろうとしても何も思いつかないのが普通であろう。だが、観察記録を見ると、実に臨場感に溢れる描写が続いてゆく。この母親という人がたまたま稀にみる‘心の機微に聡い’人であった。そして、この子どもペピもまた、実に‘心の機微に聡い’子どもであったということが大いに利とされる。読んでいて実に面白い。第三者としてもこれは読めなくなかろうと思われた。日頃心理臨床に携わる専門職の方々にぜひご覧いただきたい。これまで乳幼児観察を経験したことなかったり、或いはこれからもおそらくは経験することはないであろう人にとっても、このロンドンでの私の経験を通して、幾ばくかの己れを知る機縁を掴むことがあり得なくなかろうと思う。己れ自身を想い出すために…。そして‘いのちに寄り添う力’を期待したい。

私にとってこの母と子がどれほど得難い人たちであったかを語ることは難しいほどだ。無論のことイギリス人というものが概して‘経験’重視の気風があり、さらには心の専門家という職種に対して敬意 respect があつたりということが我が国の事情とは大いに違うところだが、この母親Mrs. Pが【タヴィストック】の企画に賛同し協力するという意味合いで【タヴィ】の研修生であった私に彼女の第一子である息子ペピの観察の機会を与えてくれたことに私としては格別な思いを懐く。決して決して報いることのないほどの恩義を彼らから貰ったという思いがする。しかしながら、当初この乳幼児観察の資料をいつかどこかで一般公開することになるだろうなどまるで念頭になかった。私が携わった彼の地でのプレイグループでの子どもらの観察例とか、もしくは St. George's Hospitalでの児童臨床のサイコセラピイの症例とは自ずと違う。乳幼児観察の場は個人の家庭であり、彼ら家族のプライバシーに深く踏み込んでゆくことになるわけで、【タヴィストック】のセミナーでの発表という場では当然、そうした経験が徹底してセラピストとしてのセンスを養い培うという建て前からして躊躇はしなかったし、セミナーのtutor（教官）にしろtrainee（訓練生）にしてもお互いがそうした糧となるものを提供しあうことの意義を疑わなかった。さらには、【タヴィストック】の伝統にcontribution（貢献）し、かつそれを担っているという喜びもあった。だがまさか、それ以外のどこかへ持ってゆけるシロモノとは夢想だにし得ないことであった。

それ以上に、セミナーでの発表は己れ自身を人前に晒すことであるから、自ずと限界があり、やはり誰しも抑制が掛かってしまう。どこまで見たものを見たとおりに、つまりは感じたことを感じたままに書けばいいのか。録音やら撮影やらの機材に頼らず、観察した事象そのままを書き綴るという場合には、やはり自分の感性が元手になる。乳幼児観察の場合、それが問題の核ともなる。つまりは己れの中に‘眠っていた子ども’が目覚めてゆくことになるからだが、心が千々に乱れるということがある。それも無意識に…。それは意識が追いつかない領域だから、それに絡め取られたり、躓いたりが大いにあつたろう。そしてとにかくにも2年間のペピの観察を終えたは終えたのであり、そしてその後の児童臨床や

らパーソナル・アナリシスやらを経て、私は、どこかで目覚めかけた私のいのちの‘行く末’を見届けねばならぬと思った。その意味で、帰国後ひたすら前を向くだけの日々で、もはや後ろを振り返るという余裕を持たずにいた。それでこの40年という歲月、これらすべてのペピの観察記録はファイルの中にしまわれ、そのまま倉庫の中で眠っていた。触ってもいない。それが今ようやくにして、何やらペピの‘出番’だという気がしたのだ。《経験から学ぶ》とは、真にいのちが引き継がれてゆくことだと思う。私はどういふいのちを得、そしてそれがどう今の私になっているのかと俄然興味を覚えた。私のWEBサイトへの掲載ということの是非はさておき、とにかく記憶がすべて曖昧模糊としたものだから、まずは自分が何を見たのかを知らねばと思った。かつて慣れぬ英文タイプライターで四苦八苦して、拙いながらもどうにか書き綴ったセミナーでの発表用のレポートはともかく、なぐり書きメモはもはや判読不能ではあった。だが、読み進む中で気持ちがちょっと圧倒された。そこにはかつての生きた私がいたから・・・。ペピもそして母親のMrs. Pも、皆、皆生きていた！そして彼らはこの長い歲月をくぐり抜けて、紛れもなしに‘私の一部’となっていると改めてしみじみと感じるに至った。そして、この経験が私の《タヴィストク留学》の最良ともいえる大きな‘宝’であったことを改めて実感した。生きるということは‘絵空事’では決してない。もしもその生が真実このようにして始まるとしたら、<どの子も皆、生きるってこと、成長するってことがほんとにその子なりに大変なんだ>ということに深く目覚めさせられたということであった。いのちを愛おしいと心底感じられた。赤ちゃんっていろいろと辛いもんだよね、頑張ってる！！小さくとも一人前なんだと、その小さくてか弱いからだと、それが抱えもつ複雑極まりない心とに共感しながら、頻りと感嘆を覚えたということ。それは私の中の‘いのちの蘇り’でもあった。<人生とは生きてみなければ解らない>と、生きることを受容する姿勢が生まれてきた。それこそが乳幼児観察の私にとっての大きな収穫であった。そして、もしかしたら、これは公開するに値する何かsomethingなのかもしれないという気になってきた。読めばなかなか臨場感に溢れていなくもない。かつて私がそこで彼らとともにあったことの中に何をあなたは見出すかしらと思う。それがさまざまな意味での‘いのちの蘇り’であって欲しい。

Mrs. Pに対して、そしてペピにもだが、どれほど彼らに感謝の念を伝えたいとしても、今はそれも叶わぬ。ここにこのような形で彼らの生きた証しが刻まれるとしたら、私としてはただ嬉しいと思うばかりなのである。だが、そこにまだ迷いはあった。それで私は、胸の内でMrs. Pに相談をした。すると、即座に<That’s wonderful！！>とおっしゃる彼女のお声が聞かれた(?!) 40年昔と何ら変わらない、いつもながらの晴れやかな笑顔、そしてその瞳を輝かせながら・・・嬉しかった！そこで迷うことなく、ここに公開することに踏み切った。ノーカットで！英文資料の分を和訳し、『後記』を付け加えた。

まずは、ここで最初にペピの生後9ヶ月間に亘る成長の概要を綴った私のレポートをご覧ください。そこからおそらくペピとその家族について概括的な理解を得ていただけるものと思われる。さらに《ペピ；0歳》、そして《ペピ；1歳》をご覧ください。最後に《振り返りの記》で、あの当時懐いた私の個人的な感慨、それやらまたその後この経験が私の胸に残した余韻としてのさまざまな事柄の一旦をお話し出来ればと思う。尚、Mrs. P & ペピへ愛を込めて、イラスト画を添えた。 (2014/08/05 記)



Mrs.P の思い出に

【乳幼児観察例】 ペピ（男児；1973年12月16日生）

■ ペピの生後9ヶ月間にわたる観察の概要 ■

[※註； これは、1974/09/24 に【タヴィストック・クリニック】に於いて、故 Mrs. Marth Harris の《Infant Observation Seminar》で私が発表した際に提出したレポートの和訳である。]



家族背景；

母親 (Mrs. P) はその外見からしていかに ‘母親らしさ’ の溢れる人であった。がっちりとした体躯で、しかもふんわりと丸味を帯び、いかにも暖かみがある。ブロードの髪の毛の白人女性であり、年齢は今や41歳になろうとしていた。彼女は Primary School の教師であり、5歳児以下の低年齢の子どもらのクラスを受け持っている。彼女は母親が42歳のときに生まれた子どもだそうで、ヨークシャー出身である。平和で穏やかな家庭的な雰囲気の中で、他の何人かの同胞とともに育ち、‘無邪気でおとなしい’ 女の子であったと自らを振り返る。もはや両親も親族のほとんども身罷ってしまっているんだとか。。。

彼女はロンドンで、27か28歳のときに、33歳になる大学の教師と結婚した。彼の専攻はアラブの歴史であった。彼の研究という名目もあり、彼らは随分旅行をした。特に西アフリカ、そして東欧諸国

を歴訪した。彼女の夫なる人は自らの研究に没頭していて、妻としての彼女をほったらかしにすることが多かった。それでどんなにか孤独に思ったとしても、彼女はその機会を存分に愉しもうとした。そして訪れた地でその土地の人々との実に貴重な経験をすることが出来た。(＜時として、とんでもなくもの凄い経験も出来たの＞と、彼女は語る・・・)結婚してごく初期の頃、彼女は夫が大学の同僚との間に同性愛的な関係があると気づく。その後折々に、彼が彼女の服やらを(もしくは彼の母親の服をも)身に付け、ドレッシング・アップに興じている姿を目の当たりにし、彼がそうした実に奇妙な性癖の持ち主であることを知るに至った。或るとき、彼らはアメリカに滞在していた母親を訪ねた。そこで彼女は、夫とその母親とが互いに激しく憎悪し合っているのを見た。彼らの関係がそうしたものだから、当然ながら、その母親は義理の娘となる彼女をも憎んだ。そうしたことから、彼女は夫の問題を理解する鍵を得たと思った。そして彼に対して大いに同情し、彼らの結婚生活をなんとか維持してゆこうと思い、破綻を防ぐためにも精神科医に相談したことがあった。しかしそれはなんら解決にはならなかった。夫には精神科を受診する動機づけがまるでなかったから。自分を問題だとは思わなかったし、性格を変えるなどは論外だと彼は思っていたというわけだ。そこでついには彼女も彼との生活にはどんな希望もないと諦めざるを得なかった。彼女は独りでロンドンに戻り、学校の教師という職業に就いた。こうして彼らは別居して、最後には離婚したわけだが、それでも折々には手紙のやり取りは互いに続けて、尚も‘友人’であるということである。

さて、現在の夫(J.)と結婚して5年ほどの歳月になるが、実は彼らは大学時代にロンドンで知り合い、もうかれこれ20年以上もの顔なじみなのだそうだ。彼はガーナ出身である。或る村落で育ったのだが、そこでは誰もが他の誰をもよく知っているといった、互いにごく緊密な関係性を持つところのコミュニティであった。彼は父親を3歳のときに喪っている。しかし幸運にも彼には父親代わりになってくれる実の叔父さんがいた。＜年寄りだが、ほんと実に気のいい人なの＞と彼女は語る。その叔父さんという人が彼を育ててくれたわけで、J.の性格やら知性をも養ったことになる。実際のところ J.は精気のある人のようだ。痩せ型の黒人男性である。彼は今ロンドンで夜勤の仕事をしている(職種については詳しくは触れられていないが、おそらく鉄道関係であったろう。)何やら寡黙な印象を受けたが、それは私が乳幼児観察の観察者ということで、母子における交流が観察の主題と察して、ペピの父親としての自分を‘脇役’として、どちらかというとしゃばらないようにと配慮してくれていたからであつたろう。またおそらく生来的に抑制がきいていて、それでも穏やかで、本来はユーモアのセンスもあり、心が開けっ広げで、いい感じの人に思えたのは確かである。家庭内では朗らかによく喋る母親が‘主役’であるのは勿論だが、彼も背景にいながらも、折々にちょこちょこ口を挟むことがあり、必要があれば手助けも厭わず、ペピの育児についていけばなかなか緊密で調和あるご夫婦と見受けられた。

彼らは3人の子どもを既に流産しており、ペピの誕生は彼らにとっては奇跡とも言えた。おそらく父親にとっては息子を持ったことは誇りであつたろう。だが、概してペピの育児に手を出すことは控え目で、Mrs. Pに託されていたのは事実だ。どうやら育児とは‘女性の仕事’だと彼は思っていた節がある。息子に対してあからさまに愛情を示すことにはどうやら戸惑いがあったに違いない。そこで母親がペピに

没頭していた最初の頃、彼は彼らの親密な関係から疎外されていると感じたかも知れない。しかしながら、時が経るにつれ、ペピは父親に対して反応するようになってゆき、父親の方も、ペピを自分の‘幼い弟’もしくは‘男友達’みたいに扱うようになっていった。とにもかくにも彼らの間には男同士(!)の深き良き交わりがあったといえよう。

彼らご夫婦はどちらも決して孤独を愛するタイプではなく、周りの誰彼に対しても全然閉鎖的ではない。どちらかというところ開けっ広げで、ごく気さくに振るまい、情緒的にも深く関わり、また援助を必要とする人々に対しては可能な限り惜しみなく与えるといった、どちらも実に心のあたたかい、真っ直ぐな人たちであるといった印象なのだ。実のところ、彼らの住まいには或るイギリス人の女性(Ja.)が同居していた。Mrs. Pの以前勤めていた学校の同僚であつたらしい。彼女も教師である。独身で中年で、ごく痩せ型で、あまり健康そうな顔つきでない。彼女はどう見ても人好きのするタイプとはいえない。だが、根性やらユーモアのセンスもあり、なかなか興味深い女性のような気はする。彼女は自分用のフラットを購入する算段をしており、ほんのしばらくの間彼らの住まいの一室に間借りを願い出たというわけだ。だがここに至って、どうも彼女はなかなか立ち退かない様子である。なぜなら今の暮らしはとても居心地よさそうで、誰も彼女を迷惑がってははいないからである。Mr. & Mrs. Pにとって便利なのは、彼らが夜外出するときに、ペピを彼女に預けてゆけるということだ。おそらく彼女はペピが大きくなって、どうしても彼専用の個室が必要だという事態に至るまでは、このまま居座るつもりでいるのだろうと思われる。彼は今、両親のベッドルームで寝ている。Ja.は、勿論のこと、ペピにぞっこんなのである。そして彼女の流儀でだが、てきぱきとうまくペピを扱い慣れている。母親はペピの養育に関して彼女を邪魔扱いにするどころか、鷹揚に構えている。或る日、彼女はペピに言った。<あらまあ、爪が伸びてるわねえ。Ja.に爪切ってもらって頼もうね。彼女は爪切りがほんとに上手だものね。でしょ?>と。父親、母親そしてJa.はそれぞれ勤務時間が違うとかで、同じフラットだが三人三様に別々に暮らしているんだと母親は語っている。いずれにしても、彼らは‘家族’であることには間違いない。家の中は全体にゆったりした気楽な雰囲気漂っている。



ペピの成長のあらし;

私がペピに会ったのは彼が誕生後6週目を迎えたときである。まだどんな対象にも目を焦点づけることはなかった。生きてる現実、彼にとっては絶え間ない迫害 persecution の連続であるように私には感じられた。お乳を吸うことも、ゲップを出すことも、お腹の不調からくる痛み、それに入浴、オムツかぶれ、その他諸々。彼は生真面目な顔つきの、少しだけ黒っぽい皮膚で、茶褐色のまっすぐの髪の毛と黒い瞳の男の子であった。私が痛く心打たれたのは、彼が実に日常のルーティンにごくすんなりと嵌った(fit in)ふうに慣れ親しんでいるということである。折々の状況がどれほど苛酷で動揺に満ちていたとしても、彼はさほど騒ぎ立てるでもなく、穏やかに万事なんとか切り抜けていた。この時期にはすでに彼は母親と良い関係性を築き、信頼が培われていた模様である。母親は彼の扱いがうまく、とてもやさしげで、いつも朗らかな声の調子で彼をあやしたり歌ったりしている。母親は、この時期ペピの外

界に適応してゆくという大変な仕事に直面する上であらん限りの安心を保証してやろうとしていたように思われる。

この後2,3週間経つと、彼の様子が明らかに変わった。目に見えて動きが活発になり、安定してくる。彼はあらゆる事態に備えてなんとか凌げるといった自信をものにしたように覗かれた。彼は目の前の物体をどこかぼんやりとした目つきでジッと眺めていた。おそらくその形は彼の瞳には輪郭を持たず、ただぼんやりとしか映らなかったであろうが…。7週目に、母親の顔(その声、匂い、そして感触)が彼になんらかの意味をもたらし始めている。母親があやす声に反応し、大きな微笑を浮かべた。8週目では、彼の身体動作は活発になり、しきりになにやら力強くブゥブゥやら喃語を発していた。彼は自分の周りの居る人々をしっかりと意識していた。誰かお客さんが居たりすると、彼は興奮しがちだった。実際、彼は何ごとに対しても注意を怠らず、かつ受容し、反応する子どもであった。時々それも気分が変わりやすいともいえなければ…。笑っていると思えば、もう次の瞬間には泣き出すといった調子なのだ。彼の適応能力(もしくは、彼の内的世界の均衡)はまだまだ十分に安定しているとは言えない。

次のステップだが、ペピの自己主張 self-assertiveness が明らかになってきている。まさに自分の感情を母親にちゃんと伝えんとする意図が覗かれた。事実、母親という人は、他人の感情に対してとても鋭敏な感受性が備わっていて、‘人の心を読む’ことに長けていた。彼女の小学校の教師という職業がそうした彼女にそもそも備わった才能をいっそうに鋭敏にさせたものと思われる。10週目、ペピは‘割礼’を施されたとのことだった。それで母親が言うには、ペピはその顔に恨みや絶望を浮かべつつ、
<なんで言ってくれなかったの？ どうしてこんなこと、ぼくにしちゃったわけ？ >と訴えたんだそう…。

11週目に、彼のまなざしはまったくのところ母親の顔に固定されたみたいにそのまま動かない。この世のなかで誰もいない、母親だけが心底彼にとって大事な人なのであった。母親に向けてのすばやい反応、彼のその貪るような、熱情のこもった目つき、その瞳の輝き！そこで母親の方も大いに気を良くして、彼にしきりにおしゃべりをして話しかけたり、歌を歌ってやるなどする。12週目、彼はウーウーやらブゥブゥやらと頻りに音を発し、恰も母親の歌に唱和するようでもあり、または自分も負けじとばかりに彼女のおしゃべりに呼応しているふうでもあった。

11週目には、彼の握りこぶしは次第に開いて、指がそれぞれに自由になってきて、指がトントントンといかにもリズムカルに叩く動作をする。この時期には彼は頭を自在に左右に回すことが出来ている。それに16週目以降、彼が自分のからだのイメージを把握しているようすが明らかとなる。またどうにもうまく協応できないぐにゃぐにゃしたからだをなんとかコントロールしようと懸命なようすであった。彼はお腹を動かし、足を蹴るやら、腕を振り回し、それを上げたり下げたり、また握りこぶしを口へと持ってゆくやら出すやらで、なんともハチャメチャで落ち着きのない様子なのであった。彼はこうした動作やら自己刺戟に没頭していた。やがて彼の動作に協応性が出てきた。彼は赤ちゃん用のカップを両手で持ち、自分で飲み物を飲めるようになっていた。

4ヶ月1週目(17週目)以降19週目になると、彼は明らかに‘記憶力’が覗われた。天井からぶらさがっている玩具があり、その紐を引っ張ると、その動物のかたちをした物体は飛び上がり、両脚があがるのであったが、ペピはその玩具に愛着を示し、とても喜んでなんどもなんども自分で紐を引っ張ることを繰り返した。彼の視る力がとても機敏なのは驚くほどだ。物をジッとよく眺めては、その動きのさまに目が熱心に追ってゆく。彼は、今や彼を取り巻く周囲のあれこれを鋭敏に意識するようになってきている。そしてまた、それらの中でも取り分けて母親の顔(そして声音)は彼の注意を引くものだ。

最初の頃、私という観察者の存在は、ぼんやりとした、どちらかという存在していないふうであったろうが、この点では私と母親とは区別されていなかったろう。私は‘彼女’でもあったろうというわけだが。例えば、母親がキッチンに行った際、ペピがしきりに泣いたので、つい私は彼を抱き上げ、あやしたのだが、その途端彼は泣きやんだということがあった。11週目に彼は私に最初の微笑をした。だが大概のところ彼は私が彼らと一緒に居ることには大して気にならないふうであった。それが16週目になると、彼はなんと私の顔をジッと凝視し続けたのだが、そのまじめくさった意図的な目つきは、まるで私を丸ごと摂り込むかのようなのだ。そして或る出来事があった。ペピが4ヶ月以降の18週目の頃であったが、私がどうやら母親とは違う別の誰かと識別されたようなのであった。母親がキッチンにいている間、彼は泣き出し、それで私は彼の方に近寄った。彼は私が視野のなかに入ったのに気づき、反射的に微笑を浮かべた。ところが、彼はそこで一瞬変だなどいわんばかりに戸惑ったふうにして、落胆というか失望の色を浮かべた。いかにもくなんや、これ誰や? >といった感じで・・・それからワンワン泣き叫び、もはや慰めようがなくなってゆく。そこに母親が戻ってきて、彼を抱き上げると、まるでその瞬間に彼の泣き声は止まったのである。

他にもこれと同様なことがあった。4ヶ月1週目であったが、ペピが泣き声をあげた。そこに居合わせた或る父方の親戚筋の若い女性が彼を抱き上げ、膝の上に置いた。幼い子どもの世話には手慣れたふうではあったが、そもそもペピには彼女は大してお馴染みではなかったろうと思われる。ペピはパニックを起こし、恐怖で凍りついたふうな、必死の形相で泣き叫んだ。母親がやってきて、どうか彼女の腕のなかに抱えられ収まったところでようやく彼は静まった。それは、母親が彼の心のなかでは、唯一絶対の掛け替えのない人としてあることを示していた。実際のところ、彼のまなざしは、いかにも身も心も捧げたといったふうな熱情に溢れ、絶えず母親の姿を追いかけているのが認められた。

ペピが3ヶ月2週目になった頃、母親は職場復帰し、彼を学校へ連れて出勤した。彼女が教室で子どもらを教えている間、ペピは窓の外で一人置いておかれた。やがてMrs. Nというベビー minder (baby-minder) の女性がペピを預かることになり、毎日午後には彼を2時間ほど散歩へと連れてゆくことが習慣となった。彼女のクラスの子どもらは誰もがペピの相手におおわらわで、競って彼を可愛がった。この経験がおそらくペピにしてみれば、母親が自分の世界の中心なのだということを改めて知らしめたということであろう。彼が4ヶ月になると知らない人に対して不安やら恐れを示すようになっていたが、それは母親が彼に哺乳瓶を導入した時期なのである。これは母親が仕事している間(9:00am-3:30pm)

にMrs. Nにペピを預かってもらうためであった。そしてまたこの時期、4ヶ月1週間目というのは、彼が指吸いのサインを見せ始めた時期でもある。

ペピが11週目以降、食事にシリアルが導入された。最初はスプーンに2杯ほどであったが。そして徐々に彼の食事はシリアルと哺乳瓶と母乳という混合食になった。毎回食事が済んでから、母親はいつも彼に存分に母乳を与え、気の済むまで吸わせた。彼がすっかり飲み疲れ、満足して寝入るまでは…。彼はどんな食べ物も嫌がることはなく、どちらかという母親の腕の中でお乳を吸っている間の方がむしろ落ち着きがなかった。腕を振り回したり、母親の着ている服に触り掴もうとしたり、それに母親の顔やらオッパイにもジッと目を凝らしているふうであった。

4ヶ月2週目の頃である。偶然彼は自分でゲームを始めた。顔をタオルで覆い、それからそれを取り除くといったことだが、なにやらまじめくさったふうな、どうなってるんだろと状況を吟味しているといった印象だった。それから後(4ヶ月3週間目以降)、これが母親との愉快的遊びになった。彼女がくいいないないばあ>と言うと、彼は声を上げて喜んだ。彼らはそれをなんども繰り返した。この時期彼の指吸いがとても頻繁になってきたのが認められる。観察していて実に面白かったことがある。授乳後、彼が寝入ったので母親が彼を両腕に抱き上げる。すると間髪を入れずに彼の左手の親指が彼の口へとまさに‘直行’し、しっかりと咥えられるのであった。まったく無意識に、目はしっかりと閉じられたままで…。最初の頃、母親は彼に<指吸いなんて必要ないでしょ>と言っていた。つまりは<充分に私のおっぱいを吸ったんだからね>という意味だが。しかし後になって(彼が5ヶ月1週目)には、母親は考えを変えたとやらで、<どうやらこの子は特別に思う存分吸うことが必要みたいだわ。だから、今となったらむしろ指吸いを彼に励ましているぐらいなの…>とのことだった。

ペピが4ヶ月3週間から5ヶ月3週間の間、ペピと母親との間には実に親密な情愛の交わりが続いていた。そして時折、彼は観察者である私の方を振り向いた。まさに誇らしげなその顔は、恰も彼らの親密さを見せびらかすみたいなふうで、<ほらね、ママと一緒に、ぼく、すっごくハッピーなの>って言ってるみたいなのだった。そうした嬉しくてたまらないといった彼の表情を見慣れている私にしてみたら、ちょっと驚きとなる或る‘事件’が起きた。それは彼が5ヶ月2週目のことだが。母親は美容院に行つての帰りで、明らかに予定していたペピの食事時間に遅れた。内心慌てふためきながらも、おっかなびっくり居間を覗く。私も彼女の後に続いて覗くと、そこはシーンと静まり返っていた。ペピはただ黙々と父親の膝の上で哺乳瓶を吸っていたのだが、母親の姿をちらっと認めても、まるで彼女がそこに居ないかのように無視している。明らかに心の溝を抱えて、無関心を決め込んで、まったくの無反応でいる。それからこの後に母親が彼のオムツを取り替え、お尻を拭いてやろうとしたときのことだが、彼はまさにその瞬間、大量の‘緑色’のウンチをしたのである。まったく身動きもせず、無表情なままで…。私はこの光景に衝撃を覚えた。内心<あれまあ、‘悪いオカアチャン’がミンチにされちゃったというわけだね>と呟いた。ここで母親は、ペピが腹痛を起こしていたのではないかと察し、それでおそらく大いに泣いていたんだらうと了解した。そこで、彼のからだに手を添えて、尚のことオムツの中に排便を促した。それから

くうん、これでいいの。洗濯物が助かったわ」とやや冗談っぽく言った。ここで一段落し、どうにか今や二人の間では「相互交渉 negotiation」が成立したかのようだった。ペピが母親に対して自分の思いを伝えるさまには実に目の瞠るものがあった。

ペピが5ヶ月3週目のとき、母親が学校から子どもたちをピクニックに連れていった際、或る想定外のトラブルに遭遇した。公園の芝生の上に置いてあった子どもらの手荷物から食べ物やらお金やら他の所持品(鍵も)盗まれるということが起きた。彼女がそのことを話題にして私に語っているとき、ペピは彼女の話の最中、いかにも母親を元気づける(cheer up)ふうな可愛らしげな声で遮ったのである。その後母親はキッチンに彼のシリアルを取りに行ったのだが、そこにたまたま居合わせた Ja.に事の顛末を語るのに15分以上も費やし、キッチンに長居をした。居間に私と一緒に置き去りにされたまま、しばらく彼はお行儀よくしていようと懸命に努めていた。折々に、ちょっと彼は涙ぐむことがあったが、私のく大丈夫よ、ねっ、ペピ>やら、なだめようとする声でどうやら気持ちを落ち着かせたり、または指吸いをしては気持ちを慰めたりするのであった。しばらくしてなにやら悲しげにしきりにぐずり始めたが、決して我を張って泣き喚くといったことはなかった。おそらくどこか母親の心の動揺を察したものか、この場は取り敢えず忍耐しなげと自分に言い聞かせたといった具合であった。日頃いつも朗らかで鷹揚に構えている母親を見慣れている彼にしてみれば、こうした傷ついている(vulnerable)母親を見るのは滅多にないことで、それに対して彼なりに幾らか思いやり(concern)の芽ばえている様子が実に瞠目された。

ペピが6ヶ月になったとき、彼は予防接種をクリニックで受けたことで、2,3日ひどい状態が続いたことがあった。或る日のこと、彼はどうしようもないほどに落ち着かず、ぐずって泣きじゃくっていた。食事時に彼は食べ物を全然受け付けず、拒んだのである。見ていて胸がつぶれるほどであった。母親は彼をなだめては、からだをやさしく撫でてやり、彼を胸にぴったりと近づけ抱きかかえてやるなどあれこれ懸命に彼をあやした。<ほんと可哀想にね。ママもどうしてあげたらいいのかわからないわ。だけど、少しでもよくなるようにママも一所懸命にやるわね(Oh, poor darling! Oh, I don't know what I could do for you. But I will try my best to make you feel better)>と声を掛けた。しかしながら、彼はただひたすらぐずって泣き喚きを続けた。彼はからだを振っては母親から身を引き離そうとするのであった。まるで彼は‘オッパイ’を怖がっているかのようなのだ。<悪いのはミンナミンナおまえのせいだ！>ということだとしたら、この意味では、彼が恐れたのはむしろ己れ自身の攻撃性の苛烈さなのかも知れないのだが…。それでごく自然に母親のオッパイを傷つけないという抑制も働いていたのかも知れない。母親からたくさんの慰めの言葉を掛けてもらい、からだをやさしくさすってもらったりで、どうにかちょっとましな気分になったものか、彼はシリアルを受け入れた。だが、この日、彼は決して母親の乳房とは折り合いが付かず、いかにも恐ろしげな目つきをして母親の腕から身を逸らしたのである。それで結局この日ペピは母乳を飲まずにベッドへと連れられて行った。

彼が6ヶ月2週目になる頃、ペピの食に対する「食欲さ greed」がめざましくなった。彼の食事メニューは今や「赤ちゃん用固形食」そして「哺乳瓶」であるが、彼の食欲は大変なものであった。たくさんの

固形食を食べ尽くしたあと、彼は哺乳瓶が与えられた。ものの本には「6ヶ月の赤ちゃんには3オンスのミルク」と書いてあるとかで、彼が哺乳瓶を幾らか飲んだ後、母親はそれを取り上げた。ところが彼は唸り声をあげて、哺乳瓶に手を伸ばし、それを引ったくり、その乳首を口に啣えた。母親はくもう、ほんとに頑固なんだから You are so determined ! > と言う。そして結局のところ、彼は哺乳瓶を飲み干した。つまり彼は6ヶ月の赤ちゃんが飲むべき量の3倍近くも飲んだことになる。そして、尚も哺乳瓶を母親に取り上げられまいとした。 <太っちゃうでしょ。お父さんがペピは食べすぎだって言ってなかった？ > と彼をからかう。食事時間をどんなに彼が嬉しがっているのかは実に目を瞞るものがあった。彼が7ヶ月には、スプーンが口に向かってやってくるのを充分に意識しており、待つ体勢でいる。しっかりとスプーンに向けて、自分の口と目を協応させていた。同時に彼は自分が座っているベビー・チェア、そしてそれに付いているベルトに噛みついたりしゃぶったりとなかなか忙しい。時折は私の方を見て、とても友好的な笑みを浮かべる。そして彼は自分の舌を使って口の中を嘗め回しているのがあった。これは概ね彼が独特の手の動きをし始めたのと同じ時期である。彼の両腕がヒラヒラと空を舞うのである！これは後に奇妙な手のダンス動作へと発展する。彼が7ヶ月になった頃には、彼は床に坐り、そのまま首(からだ)を後ろへ回すことはごく容易に出来るようになっていた。自分ひとりで玩具で遊びに興じるようになり、そうしながら頻りにグウグウやらガーガーやら喃語を話してもいる。手近にあるどんなものをも手に取っていちいち吟味をする。触る、掴む、そして放り投げるなど。殊に彼は‘ガラガラ’を振るのが大好きで、頻りにそうやって自分が奏でる音に聴き入っていた。

彼が7ヶ月2週目になった頃、その食欲は大変なものであった。彼は哺乳瓶を飲み干し、それでも終わりというわけにもゆかず、ぐずりながらあからさまに苦い失望感を吐露する。彼が身辺にあるどのような食べ物にも熱烈な興味を覚えるようなのが、見ていて笑いを誘うほどであった。例えば、私が彼のごく傍らで飲み物をいただいていたのだが、彼は私の方へとからだを近寄せ、手を伸ばし、私が手に持つコップを掴もうとした。それからまた、彼はテーブルの上にあったピーナッツを入れた容器に頻りに熱い視線を投げかけていた。おそらく彼は我々がその容器からピーナッツを摘まんで食べているのを注意深く観察していたに違いない！彼が物を手に掴み、すばやく口に入れる動作はだんだんその器用さを増していき、びっくりするほどであった。だが、時にはそれは危険なことも繋がるわけで…。或る日、彼が7ヶ月2週目のときだが、母親が彼のオムツを交換していたとき、傍らにあった安全ピンに手を伸ばし、すばやくそれを口に入れたのである。その動作は2,3秒も掛からないほど素早いものであった。また或る時、彼はバスルームの床にうつ伏せになっていたのだが、電気のコードの方へと手を伸ばし、それに触ろうとした。それを目指して、断固とした面持ちで、手を伸ばしてからだ全体を思い切り前方へと進ませようとする。どうやら‘悪さ’を覚えたようで、大人の眼が離せなくなってきたみたいである。或る日、ペピの子守りをしてくれるMrs. Nが彼をスーパーマーケットに連れて行ったんだそう。彼をカートの中に入れて押して店内を回っていたそうだが、彼はそこでまっすぐに立った姿勢となり、手を伸ばしては手近な物をなんでも隙あらば掴み取ったということらしい。それから、一つ可笑しいことがあった。或るとき私が彼の身近に坐っていた時のことだが、彼は私の手を自分の手のひらに掴み、それから私の人差し指を口に入れて、それを吸い始めたのである。今や彼はしっかりとお座りができるようになっていて、傍らの

椅子とか母親とかに両腕でしっかりと掴み、立ちもできるようになっている。だが一度立つと、次にはお座りするの簡単ではない。ともしっかりとした脚なのだが、まだとても硬いのである。7ヶ月2週目になると、彼は後ろ向きに少しは這い這いできるのだが、前向きにはまだ這い這いする動きは見せていない。彼の手の動きは実に著しい。その手もしくは指先は頻りにくねくねと揺すり、そして彼の両腕は空を舞うのである！彼はベビーサークルの中で一人玩具と一緒に遊ぶときは実に満足しきっている。手にし得るだけのあらゆるものをすべて、吸ったり、しゃぶったり、噛んだり、揺すぶったり、叩いたり・・・。

夏季に3週間の観察のお休みがあり、その後訪問を再開し、彼に会った時、彼は8ヶ月2週目であったが、彼の私への反応は実に劇的と言えた。母親が玄関先に姿を現し、私を招き入れた。腕にはペピを抱えていた。彼は私をチラッと見るや、途端に不機嫌そうなしかめっ面をした。私が彼の方へ一歩近付くと、彼は大泣きを始めた。まるで恐ろしげなものを目にしたみたいに、恐怖で慄き、泣き叫んだのである。その後、私が母親に最近ペピは見知らぬ人にはどう反応するのかと問うた。すると、彼女は、もし誰かが、それがまったくの見知らぬ人であったとしても、もしも彼に充分にお近付きのチャンスを与え、慣れたり受け入れるための時間をちょっとでも与えられたりすると大丈夫なんだけど、もしも彼に強引におしゃべりをしかけたり、抱こうとしたりすれば、彼はすぐさま泣き出すんだそうだ。実際のところ、ペピは人を実によく観察している。それは明白である。

8ヶ月2週目のこと、ペピの自己主張の強さが母親によって認められた。例えば、彼は自分の欲しいものを身振りで要求する。顔の表情やら音を発するやらで・・・それで母親が彼の欲しいものが何かをすぐさま察し得ないことがあると、彼は焦れて欲求不満を露わにする。それで結局のところ彼女がそれを得たとき、つい彼に向かって、<なんで、最初にこれが欲しいって言ってくれなかったの？>と言うんだそうだが・・・。

この時期になると、ペピは父親が彼の世界の中でも意味ある存在となってゆく。彼は父親を熱心にいかにも好ましげに見上げるのであった。ここに至っていかにも彼は父親といい交わり companionship を培ったものと見受けられた。実際、二人は一緒にバアバア、ブブブーやら、メチャクチャな音を奏でては愉しんでいて、全然飽きることがない。また、両親が、または母親と私が会話しているときも、彼は時折割り込んでくる。甲高い声を張り上げるなり、ブブブーやら、勢いづいて頻りに喃語が飛び出す。恰も我々の会話に加わっているかのようだ。

彼の食欲は尚もかなりのものだ。徐々に彼は哺乳瓶への執着を減じている。その代わり離乳食へと嗜好が移ってゆく。例えばヨーグルトには目が無い。彼がそれを手にするときの熱心さとそれを食べ終えてもう無くなったときのがっかりした顔というのは見ていると可笑しくすらあった。

彼の手を空に泳がす動作はなんとも奇妙な具合になっていて、さらには今や体ごと大きく揺さぶる。母親は笑いながら、<これって、どうも精神遅滞とか痴呆のサインじゃないかしらねえ>と彼を揶揄す

る。私もふと面白い連想が湧いた。それって、どうもアフリカの土着民のダンスから来てはいないかと。つまりは父親の祖先から受け継いだものというわけだ。しかし私の観察からして、やがてその彼の手の動作はどうやら彼自ら己れを安心させることに役立っているということが分かった。つまりくほらほら、もう直だよ。来るからね。今すぐだからね・・・>と言った具合である。事実として、それは彼が食事の準備されるのを待っているときとか、スプーンが口に運ばれるのを待つ間にもよく見かける仕種なのだ。

さて9ヶ月になった頃、ペピは驚くほどに手先が器用になり、玩具と遊ぶようになった。掴んだものを片方の手からもう片方の手へと換えたり、引っ張ったり、叩いたり、もしくは揺すぶったりと、的確にその用途に合わせて遊ぶのである。このようにして、彼は自分ひとりでも飽きずに遊びに没頭できるようになっている。それも母親がどこか身近にいと分かっている限りだが、母親のことはまるでかまわず一人遊びをかなりの時間続行できるようになっている。



考察；

ペピの生後9ヶ月というこの期間に、実に目覚ましい成長を遂げ、また多くのことが起こったわけだが、それらを振り返ると、ペピの性格 character といつかパーソナリティ personality がいかなるものかを幾らか示唆しているようにも思われる。

まず取り分けてここで挙げられるのは、彼の初めの頃(16週目)の遊びである。かなりの間オッパイを吸うことに没頭していたあとで、彼はふいに頭を後ろ向きにして、天井からぶらさがっているモビールに目をまっすぐに向けた。それからまた母親のオッパイへと向きを換えたのである。こうしたオッパイからモビールへ、そしてモビールからオッパイへと目で行きつ戻りつを何度も繰り返した。まず最初に私の脳裏に浮かんだことは、彼のオッパイへの‘貪欲さ greed’がどうやら危険に覚え、それでその愛着(しがみつき)から己れを引き離すのに別の対象物へ気持ちを切り替えさせたということではなかったかということ。また2つ目には、彼は自分にこんなふうに語ってもいたようだ。<(オッパイは)いつもここにあるよ。たとえいなくなつて(目に見えないとして)も、ここにあるからね(すぐ戻ってくるんだからね)>ということ。<だから、大丈夫、大丈夫だからね！>というわけである。

この最初の連想についてさらにもう一つ、ペピが9ヶ月のときの或る別の観察事実が挙げられる。彼は同居人のJa.の顔を見詰めていたのだが、その歓喜のさまは恰も彼が彼女に激しく恋をしているかのようだった。私はこれにはちょっと戸惑い、些か訝しくも思った。なぜならばこの当時、彼は母親を執拗に恋焦がれ求めることが幾分減少しつつあるかのような印象があったからだ。しかし、母親が私に報告し、それに拠ると、それは或る晩のこと、11時過ぎに母親は彼のオムツかぶれがどうなっているのかをちょっと覗いてみたんだそうだ。彼は眠たげで、幾分うとうとしていたのだが、それでも母親に向かって、いかにも嬉しげに微笑んだり、のどを鳴らすやら、クークーとささやくやらだったそう。それで母親が灯りを消して部屋を去ろうとしたとき、彼は泣き出したんだとか。それで彼女は彼を彼

女の寝床へと抱いていったんだとか。そしてペピがもう寝たと思ったとき、彼を抱いてコットに移したんだとか。ところがその途端、またもや彼はむずかかって泣き声をあげ始めたんだとか。こうした同じことが何度も夜更けの1時半過ぎまで繰り返されたんだそう。そこで私は、ペピのJa.への‘恋心’とは或る意味で置換 displacement ではないかというふうに思った。つまりそうして彼は母親に対して懐く己れの苛烈な恋情を移し変え、Ja.を‘安全弁’として発散させたということではなからうかと・・・。

上記の私の2番目の遊びに関する解釈だが、他の観察例にもそれと似たようなことが窺われる。彼が8ヶ月3週目の頃、彼はベビーサークルの中で遊んでいた。彼は手を伸ばして、隅の方にあったおもちゃの‘電話’を取ろうとした。だが残念ながら届かず、掴むには至らない。ほんのわずかに指先が触れ、その表面をかすった程度なのだったが、それでもなんら苛立ちやら悲嘆やらも示すことはなかった。しかしその後、母親が彼を鏡で遊ばせようとして、抱き上げ、彼をうつ伏せにしたのだが、その瞬間(ほんの数秒の間に)彼は両腕にそのおもちゃの電話をちゃっかり抱えていたのであった！こうしたことん意志を貫徹させ、そのためには機転を利かせるというのが‘ペピ流’であるのはしばしば目にしたことである。



‘甘えんぼう’のペピ

それから、また彼が母親から離れて、別の誰かに預けられる場合だが、彼の顔には一瞬、或る微妙な心的葛藤が過ぎるのを目にした。＜泣いてお母さんと呼ばうかな、でもお行儀良くしようかな・・・どっちにしようかな＞といった感じである。それは実のところ母親が解釈したことだが・・・それでも結局のところ、彼はすんなりと納まって、それ以上事を荒立てることはしないのである。彼の意志の堅固さと沈着さ、つまりは＜まあ、待っていればそのうちどうにかなる＞といった感じとか、俊敏さ(欲しいものを手にするのにチャンスを逃さない)といったこと、それに自信ありげな落ち着き(＜まあそのうちいずれものにしてやるわい・・・＞)といった感じはペピについて著しい特徴かと思われる。此の点において、私には彼がこの時期(9ヶ月)になってもまだ這い這いを始めようとしなないのは興味深く思われるのである。

(1974/09/24 記)

【イラスト画;「訪れの季節」、「Mrs. Pの思い出に」&「‘甘えんぼう’のペピ」 1981】